

〈書評〉

起源への遡行、諸力の交差

野平宗弘著

『新しい意識』

——ベトナムの亡命思想家フアム・コン・ティエン——

岩波書店 二〇〇九年六月

現実の提起する過酷な問題を前にしたとき、予め用意された解決策のうちからいずれかを選び取るのではなく、選択という事態そのものを成り立たしめ、無意識裡にそれを強いる思考の枠組みに批判の矛先を向けようとするならば、ひとはおそらく自らが用いる言語の省察へと至らざるをえないであろう。それは端的に、現実と思考を結びつけ、また両者の存在を可能にするものとして、既存の言語の指し示す意味の体系が、絶えず日常的な場面で機能しているからであるが、言語の存在に対する問いを哲学的に深化させることは、今ここで意味を担う言葉が如何にして発生したのか、その瞬間を捉えようとする、いわば起源へと向かう作業と化すこととなる。と同時にその作業は、言語をメタレベルから捉え返すために、新たな言葉を創造すること、換言するならば言葉の起源的発生を遂行的に反復することとを要請するだろう。現実の意味に対する徹底した反省は、こうして起源における言葉の相貌への思索、すなわち詩学へと、不可避免的に結びついてゆく。

本学に提出された学位請求論文をもとに、昨年上梓された本書において野平宗弘氏が解明を試みるのは、以上のような批判的姿勢をとり続ける稀有な存在のひとりである、ベトナム出身の思想家、詩人フアム・コン・ティエンの思想である。「人間は言語の奴隷」(二八頁)であると断言し、「既存の言語的妄念の破壊」(同頁)を自らの思想的課題とするこの亡命作家にとつて、現実の諸問題を根底から問うことは、それらが立脚している言語の意味体系という機制を反省するのと同義なのである。

二〇世紀を通じて戦禍を被り続けたベトナム、その地で一九四一年に生を享けたティエンは、定められた軌道に沿って周回する惑星のような存在からはほど遠く、「流星」(V頁)にも喩えられる人物であり、若くからベトナム、ヨーロッパ、アメリカを彷徨してきた。すでに十六歳にして『英語精音辞典』なる書物を刊行し、自作の詩や哲学的エッセイを執筆する傍ら、ニーチェ、ハイデガー、リルケなどの翻訳を発表、さらに一九七〇年末に前触れもなく祖国を後にしてからは、フランスのトゥールーズ大学で哲学の教鞭を執るなど、その波乱に富む半生を一瞥するだけでも、一つの場合や言語に固着せずに移動と転調を重ねる姿勢が垣間見られる。だがそこには、徹底して言語の問いへと沈潜してゆく批判的な意志が、矛盾することなく混在している。

ティエンの批判性は、とりわけベトナム戦争への態度に明確に見て取れる。東西陣営のいずれかに与するのでも、あるいは平和主義を唱えるのでもなく、彼は自らが巻き込まれた状況の奥底で働く、西洋的な近代合理主義を注視する。それは、ティエンと個人的な親交のある著者によるならば、「ベトナムを対

象とみなす思考」(二五頁)、つまり思考主体と思考対象との分離を前提とし、前者による後者の征服を含意する西洋形而上学に対して、根本的な懐疑を向ける作業へと通じる。本書は、祖国を去った後、流転の末に辿り着いたアメリカから、すなわち祖国をかつて蹂躪した国家の統治する地から、今なお批判的営為を継続するティエンの知的遍歴を、細大漏らさず跡づけようとする試みである。

その道のりは、構成・内容ともにこのうえない明晰さを帯びつつ、対象となる作家の錯綜した思考の形成過程を繊細な手つきで解きほぐしながら、同時に著者自らがその過程を体験しようとするものとなっている。本書で呈示されるのは、ティエンの知的形成の糧となつたであろう様々な言説を、著者が可能なかぎり反復的に咀嚼するさまであるともいえる。ベトナムの文学史はもとより、前ソクラテスの哲学者たちから始まる西洋の形而上学的思考の総体、近現代の文学作品、仏教や果てはグノーシス主義といった宗教思想など、多岐にわたる参照項を前に、読者は圧倒され幻惑すら覚えるであろう。だが、論の展開を支える道筋は一貫している。それは、ティエンの思想をハイデガーの哲学との交渉という点から徹底的に解説するものと、とりあえずは捉えられる。

伝記的解説をなす序章に続けて、第一章ではさつそくティエンの思想の核心が考察される。それは、西洋近代の合理的思考の結実としてもたらされたベトナム戦争という状況から、「行動よりも前に近代的人間における根本的な思考の転換」(二二頁)の必要性をティエンが感じ取ったとする見立てに従い、まずは彼によるハイデガー受容を検証するというものである。

『存在と時間』(一九二七年)以来、この哲学者の存在論の根幹をなしてきた存在論的差異という概念を基軸に、ティエンは〈存在者 *Seiendes*〉を中心に据える思考全般への批判を継承したものとされる。像として世界を客体化する思考、すなわち、主体に対して〈前に―立てる *Vorstellung*〉という操作の対象として世界をみなす表象的思考からの全面的な脱却が、ハイデガーに寄り添いつつ図られるのである。このとき、ハイデガー同様、目指されるべきは〈存在 *Sein*〉の位相とされるのだが、ティエンのうちではそれが「表象的思考の脱落した出来事」(二六頁)、さらには「無」と捉え返され、とりわけ彼がハイデガーの言う *Sein* を〈存在〉ではなく〈性〉という漢語に翻訳してゆく過程で、仏教的な思想へと接続してゆくさまが、詳細に描出されている。

次に第二章では、上記の対象化・表象化する思考のうちで拘束的に機能している言語体系への批判と、ベトナム性に関する省察とが交錯する。「ベトナムの思想は、〈越〉と〈性〉の思想である」(五九頁)とするティエンの言葉のうちに、近代性の超越というモチーフからニーチェとの親近性が汲み取られるとともに、改めて〈存在〉と言語との関係性が問われることとなる。言語の発生以前に想定される混沌Ⅱ「絶対的無分節」(八四頁)、流動的な絶えざる生成状態に焦点が合わされる一方、そこで生起する原初の言葉による意味の分節化、換言するならば詩的言語の発生する瞬間の意義が、龍樹の「易化法」なども参照しつつ論じられる。

ハイデガーの存在論的思考をさらに展開したものととして、第三章では、ティエンと交流のあったヘンリー・ミラーの思想

が召喚される。ここではハイデガーとミラーとの「思想的通底性」(一四二頁)を詳述することがとりあえずの課題とされるのだが、具体的には、ミラーからティエンに宛てられた返信をもとに著者自身の確立した、「ハイデガーの Sein はミラーの Cunt である」とする挑発的な命題の、いわば証明がおこなわれている。前章で指摘された、言語による分節化以前の混淆状態としての〈存在〉の次元が、ミラーとの関連で再度考察されるときともに、ハイデガーが用い、ミラーも言及するギリシャ語の〈カオス〉が、語源的には、分節化として刻み込まれる亀裂・開けを含意するものであることが、ヘシオドスにまで遡りつつ確認される。さらに、〈ピュシス〉、ベトナム語の〈カイ〉・〈コン〉といった語の検証も進められながら、最終的には、対象と認識との一致を旨とする真理の対応説ではなく、ハイデガーがギリシャ語の *alētheia* の語源から抽出した、開け(非隠蔽性 *Unverborgenheit*)としての真理観に依拠するかたちで、詩的言語の分節化の権能が輪郭づけられる。

最後に第四章では、ティエンの二つの詩、「ミイトーの大河」(一九八〇年執筆)と「虚空のための詩」(一九八九年執筆)が、時系列に沿いながら、詩的言語への省察の深化を例証するものとして、具体的に分析されている。

ベトナムの文学や思想に関しても、ハイデガーをはじめとする哲学的思考についても、さしたる知識を持ち合わせていない評者にとり、本書が全篇を通じてきわめて刺戟的であったのは、上述の極度に簡略化した粗描が想像させるのとは異なり、(詩的)言語をめぐる一つの思考が、微細な部分にわたって浮

き彫りにされるとともに、その過程でティエンのテクストに接続される様々な言説が、読む側の記憶に埋もれていた別の言葉(詳述はしないが、たとえばティエン自身との親近性が否定しがたいルネ・シャール諸作品や、あるいはマラルメの詩論など)を呼び覚ますものであったことによる。読み手の思考に与えるその拡張性を、著者がティエンの思想の解明に施したのと同様の明晰さをもつて語ることは評者の手に余るが、本論の掉尾を飾る詩作品の分析に関連して、若干の接ぎ木的な思索を以下に記すことで、その拡張性の一端を例示しておきたいと思う。

先に述べたように、第四章ではティエンの二篇の詩が、前三章で詳述されてきた彼の言語観・真理観を実作へと適用したものであるとして分析の俎上に載せられている。そこで著者がティエンの詩に関して最後に着目するものとして、パラタクシス(*Parataxis* ないしは *Paratax*) なる言語実践がある。文法的規範に則らずに語を並べ続けることで、文を構成するというものである。ハイデガーも指摘するように、それは幼児の言語表現に酷似した言葉の配列をなす。通常の言語活動が立脚するシンタクスを「総合的秩序」(二七九頁)として批判するティエンにとり、「接近秩序」あるいは「隣接秩序」(二八〇頁)とも言い換えられるこの詩的表現の選択には、シンタクスの破壊を通じて、コミュニケーションの透明な媒体としての既成の言語に対する否定、さらには西洋的な思考の枠組み自体への批判を遂行するという意図が込められている。

文を構成する要素間の隣接性、ヤコブソンの言葉を用いるならば換喩的な関係性は、それが脱臼した状態に至るならば、通常の意味伝達を果たすことはなく、また実現された言語表現と

しては、シュルレアリスムのとも形容しうる言葉の連結を呈することとなる。著者の捉えるところ、意味からの自由を実現したかに見えるダダの音響詩に関しては、「母語の音声体系」への拘束が言及されうるのに対して（二七七頁）、パラタクシスには、意味の不全・解体という否定的操作を介した、意味以前の、言葉の生起する一瞬を具現化しようとする志向が、その遊戯性も含め積極的に付与されている（とはいえ言語においては、音韻体系からのまったき自由が不可能なように、意味からの完全な脱却もおそらくは実現できないであろう。ダダの実験的な詩の真なる意義は、既存の意味体系の破壊にではなく、むしろ言語の媒体性そのものを顕在化することのうちにあったのではないだろうか。音響詩だけでなくティエンの詩にも言えることであるが、媒体としての言語の物質的側面に関しては、表音文字／表意文字という差異も含め、なお検討すべき余地があると思われる）。

著者は、通常の言語が拠り所とする線状性、すなわち単線的な時間軸に沿って展開する性質に、以上のような表現実践の行使する、分節化による瞬間的な開示の力を対置している。つまりパラタクシスに仮託されているのは、「初源的ポイエーシスの成就の瞬間」（一三六頁）を、現実的な言語表現のうちで反復するという、言語の起源への絶えざる遡行なのである。それは、水平の時間軸に対して垂直的に亀裂を生じさせる出来事であり、「瞬＝視、瞬＝雷（Augen-Blick/Blitz）」（二七〇頁）と喻えられることとなる。

しかしながら、そもそも発話とは、連辞関係（rapport syntagmatique）における直線的な進展のみによつて構成されるわけではない。ソシユール風に言うならば、ある言語的要素が

顕在化されるに際しては、同一の場を占めうる他の複数の要素が潜在的な選択肢として同時に存在すると考えられる。線状的な言葉の連なりは水平軸には、範列関係（rapport paradigmatic）という、非顕在化の垂直軸が交差するのであり、したがつて言連鎖の継起性のうちには、並置化されうる要素間における不断の選択および排除が働いていることとなる。この点で、言葉を発するという活動は、このうえなく政治的な行為であることになろう。

ところで、著者が *aletheia* としての真理に関し、否定辞 *ai-* の機能を重視していた点がここで思い起こされる（一六二頁）。語の成り立ちとして *lethe*（秘匿）に否定辞が付加されている以上、先行するのはあくまでも「存在」が包み隠されている状態であるとされる。ハラルト・ヴァインリヒの指摘を俟つまでもなく、*lethe* はまた忘却の河 *Lethe* を想起させ、それゆえ根源的な存在の被覆状態とは、存在忘却というハイデガー的な観点から整合化されうる事態をも指す。忘却から記憶へとたらされたもの、あるいは忘却してはならないものとして、真理は改めて定義されるのである。

だが、そのことはまた、真理の事後性を確認することにもなるであろう。したがつて、おそらく真に重要となるのは、忘却の闇から記憶の明るみへと存在をもたらすために、制約となる既成の言語を批判・破壊（あるいは脱構築）することそのものよりも、むしろある言葉を選択し発する行為に不断に働いている、〈いまーここ〉の諸力を思考し、記憶／忘却という出来事の両面を総体的に捉えるための視線の変更を実践することなのではないだろうか。失語や幼児の言葉づかい、あるいは吃音

にも喩えうる、詩的言語の起源的な相貌とは、実は言語活動の常態ともいえるものであり、仮に〈新たな〉ものの創発をそこで論じうるとするならば、それは、起源の場における潜在的な言葉たちとの力の布置を喚起する、顕在化した言葉の帯びる強度によるものと考えられる。

ニーチェの『ツァラトゥストラ』からティエンが引き継いだ〈超人Ⅱ幼児〉という命題（二〇〇頁）、また「無垢と忘却は幼児であ」るとする命題（九九頁）は、ラテン語で〈幼児〉を指す *infans* という語を自然と想起させる。この語の成り立ちが、〈話す *fari*〉に否定の接頭辞 *in-* が付されたものだを知るとき、読者はひとまずパラタクシス的な言語実践の境位を如実に指示する言葉であることを確認しうるであろう。が、そこには同時に奇妙な交差が生じていることにも気づくはずである。それは、〈話せない〉もしくは〈話さない〉という否定性を帯びた状態には、先行する被覆としての〈忘却〉が、否定的契機を取り除かれた言語使用に対しては、逆に否定辞を付された〈真理〉Ⅱ〈記憶〉が、それぞれ対応づけられるという構図である。一九六四年のエッセイに冠された言葉であり、本書の表題ともなっている「新しい意識」とは、ティエン自身にとって、単なる〈新しさ〉を求めるのとは正反対の、起源へと向かおうとする退歩の意識であったとされる（第二章、注八九、三一九―三二〇頁）。しかしその向かう先の起源とは、言語以前のタブラ・ラサの状態などとはまったく異なり、並置される言葉たちの記憶／忘却をめぐる否定と肯定の様々な力が作用し合う、すぐれて闘争的な場であったはずである。

（陶山大一郎）